

## 親子分離不安と関係性の発展

— 幼児の集団活動における親子関係の変化 —

望月 愛里 (指導: 吉川 晴美)

Separation anxiety in parent-child and development of relationship  
— Change of parent-child relationship in young children group activity —  
By Airi Mochizuki

### 【問題と目的】

近年、少子化・核家族化が進み、子ども同士のかかわりや親同士が出会う場が限定され、家庭の中で親子が密着しやすい現状があり、プレ幼稚園等、就園前から集団活動への準備をする家庭が増加している。このような中で、就園前の集団活動では「親子分離」が重要視され、「親と離れること」が親子にとって大きな課題、負担となっている。しかし、本研究者は、就園前の幼児グループ活動に参加する中で、母子分離には様々な過程があることを体験し、この時期の集団活動は親子が相互に自立するために大変重要ではないかと考えた。さらに親子が分離する過程には、親子の「愛着」が影響するのではないかと考えた。以上を踏まえ、子が親から離れて初めて集団活動を体験する過程には、相互の自立に向けて親子分離不安を体験する過程があるのではないかと、分離不安から安定・自立が促されるには、安全基地の役割、すなわち愛着の質が大きく影響するのではないかと仮定し、幼児の集団活動における親子関係の変化について、特に分離不安と親子の関係性の発展に焦点を当て、検討する。なお、本研究の対象は「母」を含む「親」とする。子を養育し親的役割を取る人を「親」と表記する。

### 【方法】

(1) 文献研究 (2) 予備的研究 (参加観察・ビデオ記録、聞き取り調査): [対象] 未就園児を対象とした幼児グループ活動 (20XX・20YY年度、各20回) から、母子分離に課題を持つ3組の母子。[分析方法] 関係学の概念及びM-GTAを用い、分

析・考察。なお、本研究はあらかじめ保護者からの了承を得、個人が特定されない様、倫理的な配慮を行っている。(3) 質問紙調査: [対象] 幼稚園に通園している年少・中児の保護者: 回答者は母に限定せず父、祖父母の場合も含む (319枚配布・有効回答数188通・回収率59%)。[分析方法] 主因子法・バリマックス回転を用いて因子分析、クロス集計後 (下位尺度得点を算出。その平均値を高郡と低郡に分類) の $\chi^2$ 検定、残差分析を行い、予備的研究から設定された仮説を検証する。[質問紙の内容] フェイスシート、西澤 (2011) による幼児用不安傾向尺度から作成した『子どもの集団・生活における親子分離尺度』、愛着Qソート法 (42項目版) (近藤, 1998)・尾崎ら (2008) の尺度から作成した『子どもの親への愛着尺度』、水野 (1998) の母親の分離不安・子どもにとっての分離必要感尺度と塩崎ら (2006) の母親の分離不安尺度から作成した『親の子どもとの分離意識尺度』、永田 (2008) の母親愛着尺度から作成した『親の子どもへの愛着尺度』、手島ら (2003) の育児ソーシャル・サポート尺度・寺見ら (2008) の地域支援活動参加尺度から作成した『第三者の存在尺度』を使用。それぞれ子のはじめての集団体験について回答を求めた。

### 【結果と考察】

(1) 文献研究から、尾崎 (2003) や角張 (2004) の研究を参考に、親子分離とは、身体的・心理的接触を必要とする発達段階において親子が分離すること、さらにその分離は、集団活動において親と子の自立を目指した分離であり、親子分離は

親子が相互に自立するための体験であると定義した。また、尾崎(2001)や河村ら(1999)の研究を参考に、分離不安とは、集団において子が親から自立する過程で親を喪失するかもしれないことに対する不安、集団に対する不安から親との関係が密着することであると定義した。

(2) I. 参加観察研究から、1. 行きつ戻りつのかかわりの中で母を安全基地とし、徐々に母子分離が促進されること 2. 母子の密着した内在的かかわりや集団の存在が子の安全基地の確認を増幅させると同時に母子分離不安を生じさせること 3. 母のかかわりの変化を契機とし母も子と共に成長する関係へと発展すること 4. 母子各々の集団活動存在、発展が母の子を内接的・外接的・接在的に捉える視点を育み、母子分離も促進されることの以上4点が考察された。II. 聞き取り調査(図1.)から、1. 妊娠以前の想い、妊娠、出産、育児の時期において子との生活を送る中で、母の身体状況等のリスクを乗り越えながら母子の関わりが発展すること 2. その発展に心の支えになる存在や集団等の第三者的存在が重要な役割を果たすこと 3. 以上のプロセスを経て母の意識や行為が変化し、母子分離が促されることの以上3点が考察された。III. 以上予備的研究より、初めての集団における母子分離は、①母からの「かけがえのない存在への愛着」が基盤となるのではないか ②子が母を「安全基地」として拠り所とすることが双方の分離を促進するのではないか ③分離不安には子の不安のみでなく、相互の不安も伴い、その不安は複合的でその過程には様々なパターンがあるのではないか ④日々の生活や集団における子の成長、変化が母子関係の変化、分離を促すのではないか ⑤母子(二者)間の安定した愛着、安全基地の確立、関係性の発展には第三者の関わりが重要なのではないかという5点が仮説として設定された。

(3) 質問紙調査から、I. 各尺度の因子分析を行った結果、『子どもの集団・生活における親子分離尺度』:第1因子( $\alpha = .881$ )「安定分離」、第2因子( $\alpha = .878$ )「分離不安」、第3因子( $\alpha = .553$ )「場面不安」と命名。『子どもの親への愛着尺度』:第1因子( $\alpha = .762$ )「接近・親密」、第2因子( $\alpha$

$= .613$ )「分離・自立」と命名。『親の子どもとの分離意識尺度』:第1因子( $\alpha = .813$ )「密着・親密」、第2因子( $\alpha = .635$ )「分離肯定感」、第3因子( $\alpha = .689$ )「分離不安・依存」と命名。『親の子どもへの愛着尺度』:第1因子( $\alpha = .751$ )「不安」、第2因子( $\alpha = .745$ )「愛着」と命名。『第三者の存在尺度』:第1因子( $\alpha = .808$ )「支援する他者」、第2因子( $\alpha = .840$ )「配偶者の理解」、第3因子( $\alpha = .873$ )「コミュニケーションの理解」、第4因子( $\alpha = .897$ )「仲間との活動の場」と命名。II.  $\chi^2$ 検定、残差分析の結果(図2.)、仮説①:親の「愛着」と「分離肯定感」( $p < .01$ )の関連性は有意。しかし、親の「愛着」と子の「安定分離」( $p = .613$ )「分離自立」( $p = .478$ )の関連性は有意でない。従って、親の子への愛着の度合いが強ければ、親の分離肯定感を促進する傾向があるが、子の安定分離、分離自立との関連性は少ないことが明らかとなった。よって、仮説①の一部を支持する結果である。また、親の子への愛着の在り様は、子の成長、発達に伴い、変化、発達する。仮説②:子の「分離自立」と「安定分離」( $p < .01$ )、子の「分離自立」「安定分離」と親の「分離肯定感」( $p < .01$ )( $p < .01$ )の関連性はそれぞれ有意。従って、親から子の分離、自立が促されるには、子が安心して分離できること、及び親が分離に対して肯定感を持つことに関連する傾向、親の分離肯定感はその子どもの安定分離、自立を促進する傾向があることが明らかとなった。よって、仮説②を支持する結果である。仮説③:親の「分離不安・依存」と「不安」( $p < .01$ )子の「分離不安」( $p < .01$ )の関連性はそれぞれ有意。従って、親の分離不安・依存の度合いが強ければ、親の子との関わりに対する不安を促進し、さらに子の分離不安も促進する傾向があることが明らかとなった。また、親の「愛着」と子の「接近・親密」( $p < .01$ )親の「密着・親密」( $p < .01$ )、子の「接近・親密」と親の「密着・親密」( $p < .01$ )、親の「密着・親密」と「分離不安・依存」( $p < .01$ )の関連性はそれぞれ有意。従って、親の子への過度な愛着は、子の過度な接近行動、子への密着的なかかわりを促進し、親の分離不安を生じさせる傾向があることが明らかとなった。以上2点より、仮説③の一部を支持する

結果である。仮説④:子の「安定分離」「分離自立」と親の「分離肯定感」( $p < .01$ ) ( $p < .01$ )の関連性は有意。従って、子が安定分離、自立していく程、親の分離肯定感は促進される傾向が明らかとなった。よって、仮説④を支持する結果である。仮説⑤:「配偶者の理解」「支援する他者」と親の「不安」( $p < .01$ ) ( $p < .05$ )、親の「愛着」( $p < .05$ ) ( $p < .05$ )、親の「分離肯定感」( $p < .05$ ) ( $p < .05$ )の関連性はそれぞれ有意。従って、配偶者の理解や支援者の存在は、子との関わりへの不安を減少させ、親の愛着、分離肯定感を促進する傾向があることが明らかとなった。また、親の「仲間との活動の場」と「分離肯定感」( $p < .05$ )の関連性は有意。仲間との活動の場は、親の分離肯定感を促進する傾向があることが明らかとなった。以上2点より、仮説⑤を支持する結果である。その他:親の「仲間との活動の場」と「不安」( $p < .05$ )の関連性は有意。従って、親の仲間との活動は、子育てに対する新たな不安や心配も生じさせる傾向があることが明らかとなった。以上より、1.親の子への愛着は、親の分離肯定感を促進する一方で親の分離不安も生じさせること 2.親の仲間との活動は、親の分離肯定感を促進する一方で新たな不安や心配を生じさせること 3.集団における親子の安定分離、自立は愛着の質、すなわち子が親を安全基地として拠り所のできるような関係性にあること、また、親が子の自立を肯定的に捉えることができること等が影響することの3点が考察された。

### 【総括的考察】

子のはじめての集団で親から分離、自立していくには、①現在の親子の関係性を捉え、相互の分離不安が生じる過程を肯定的に受け入れられること ②子にとって親が安全基地となること ③第三者の存在、すなわち親にとって身近で心の支えとなる存在、仲間との活動の場が重要であることが明らかとなった。

### 参考文献

- [1] 西澤千枝美 (2011) 「幼児の不安傾向とその関連要因の検討—改訂版幼児用不安傾向評定尺度の作成—」『発達研究』第25巻 発達科学研究教育センター
- [2] 近藤清美 (1998) 「父子関係の行動観察による評価」『家庭教育研究所紀要』第19巻 小平記念日立教育振興財団日立家庭教育研究所
- [3] 尾崎恵子・吉沢あゆみ (2008) 「幼児期における愛着と社会的コンピテンスとの関連: ドールプレイ法からの検討」『富山大学人間発達科学部紀要』第2巻 (2) 富山大学人間発達科学部
- [4] 水野里恵 (1998) 「乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連: 第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究」『発達心理学研究』第9巻 (1) 一般社団法人日本発達心理学会
- [5] 塩崎尚美・無藤隆 (2006) 「幼児に対する母親の分離意識: 構成要因と影響要因」『発達心理学研究』第17巻第1号一般社団法人日本発達心理学会
- [6] 永田雅子 (2008) 「マタニティブルーと母親愛着~満期産正常児とNICU入院児の母親の比較から~」名古屋大学
- [7] 手島聖子・原口雅浩 (2003) 「乳幼児健康診査を通じた育児支援: 育児ストレス尺度の開発」『福岡県立大学看護学部紀要』第1巻福岡県立大学
- [8] 寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田環・南憲治 (2008) 「今日の母親の育児経験とソーシャル・サポートの関連に関する研究 (1) —子ども家庭支援センターを利用する母親の育児ストレスとその要因—」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』第9号中部学院大学
- [9] 尾崎康子 (2003) 「愛着と気質が母子分離に及ぼす影響」『教育心理学研究』第51巻第1号 日本教育心理学会
- [10] 角張慶子 (2004) 「乳幼児を持つ母親の「母子分離」」『家庭教育研究所紀要』第26巻小平記念日立教育振興財団日立家庭教育研究所
- [11] 尾崎康子 (2001) 「3歳児の仲間遊びにおい

る母子分離—子育て支援施設での1年間の観察から—『家庭教育研究所紀要』第23巻小平記念日立教育振興財団日立家庭教育研究所

- [12] 河村由紀・尾崎康子 (1999) 「親子教室における3歳児の母子分離に関する研究(2)」『家庭教育研究所紀要』第21号小平記念日立教

育振興財団日立家庭教育研究所

- [13] 木下康仁 (2014) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践質的研究への誘い』弘文堂
- [14] 日本関係学会 (1994) 『関係学ハンドブック』関係学研究所他

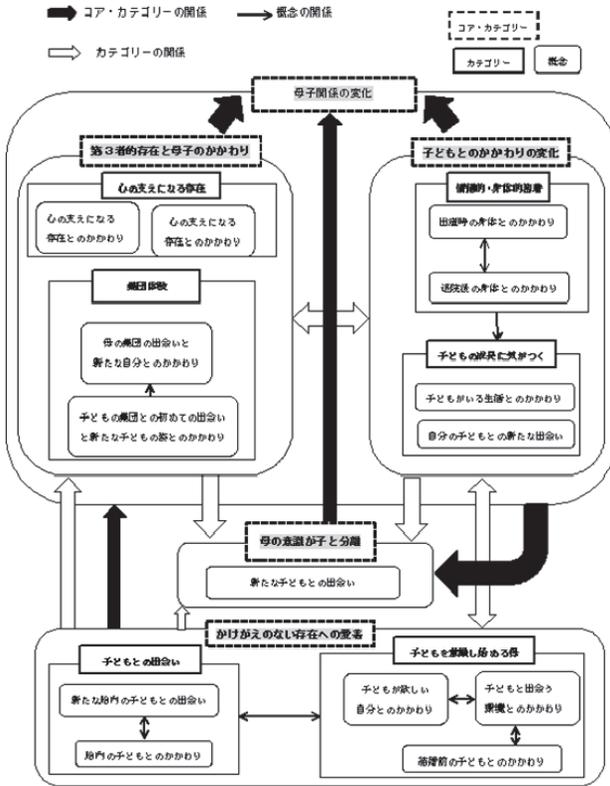


図1. 母子の愛着と母子の関係の変化

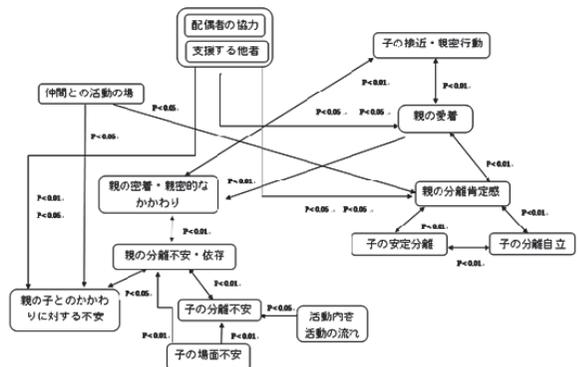


図2. 集団における親子分離とその関連要素